

HAKUOH JHS NEWS

白鷗大学足利中学校新聞 -No.75-



発行所 / 白鷗大学足利中学校新聞委員会 足利市伊勢南町4-3 TEL.0284-42-1131

つかみ取れチームの絆で優勝旗

元気爆発!! 体育祭

十月六日、暗い雲におおわれた日曜日でしたが、体育祭に臨む白鷗中生の心は晴れ渡っていました。雨天による延期に加え通り雨もありましたが、時々晴れ間も広がり、暖かい体育祭日和の中、旺盛に競技が行われました。体育祭の目玉、組別集団演技では先生方も絶賛するほど各組とも今までにないような創意に富んだ演技が行われました。

新聞委員会委員長 清水弘明

総合優勝 青組



青組組長 梅澤聖太

僕は昨年度優勝した青組の組長になった時、今年も青組に優勝杯をもたらしたいと思っていました。練習の時は人数が集まらなかつたり、集団演技もギリギリまでかかってしまつたりといろいろありましたが、体育祭が近づくとつれて組のみん

なが協力し、団結するようになりまし。長縄では顧問の小平先生もいろいろアドバイスを下さり、練習にも参加してくれました。本番では青組の全員がそれぞれにがんばつてくれ、最後のリレーで一位になった時は全員で喜びを分かち合うことができました。結果、優勝杯を

また青組に持ち帰ることができ、とてもうれしかったです。みんなの団結のおかげで優勝することができ、僕にとって三年間で一番心に残る体育祭になりました。

別組別演技 最優秀賞 緑組

緑組組長 君島愛理

私は今年の体育祭ですつとあこがれた組長になりました。組長は想像以上に大変でしたが、男子組長や副組長他みんなが手助けをしてくれたおかげで、スムーズに練習が進みました。体育祭当日、前半の競技はまずまずといったところでしたが、一位との差が開き、みんなのテンションも自然と下がつてしまつていました。でも、ここで流れを変えたのが組別集団演技でした。私たち緑組も力を入れていました。練習では太鼓とダンスの合わせがなかなかうまく



いかず、何度も練習したり修正したりしました。最初は声が全然出ませんでした。最後にはのどがかわるくらい大きな声を出せるまでになりました。そして本番、私たちは心一つにして今までが一番いい演技をすることができました。その結果、見事最優秀賞をとることができました。この時、本当に今までがんばつてよかったなと思えました。今年の体育祭は三年間で一番の思い出になりました。



体育祭実行委員会

僕は三年連続で体育祭実行委員になりました。そして今年も立候補して実行委員長になりました。今まで先輩方の活動を見て学んだことを活かして頑張りました。今回の実行委員会では一番印象に残ったことは、選手宣誓です。滝川クリステルさんの「おもてなし」を言うのは恥ずかしかったのですが、何度も練習し本番では間違えずに出来ました。評判も良くよかったです。委員会ではみんなが、テキパキと働いてくれたおかげで仕事がスムーズ



委員長 阿部大夢

に進み、僕一人ではできないことも副委員長の原みどりさんたちがサポートしてくれたおかげで、体育祭を成功させることができました。本当に感謝しています。最後の体育祭は、思い出がたくさんできました。本当にありがとうございました。本当に「サイコー!!」でした。

響けハーモニー 合唱祭

私たち3年生にとって、今回は最後の合唱祭でした。2組の音楽の授業は何回もつぶれてしまい、少ない授業と朝と放課後という限られた時間の中で、精一杯練習してきました。課題曲である「大地讃頌」は初めて4つのパートに分かれる曲でした。3つの他のパートが聞こえる中で自分のパートを歌うということはとても大変なことでした。自由

曲の「三月九日」は二年前先輩方の歌声を聞いた時に、「3年生になったら歌いたい」と思っていた曲でした。だから、とても嬉しく気持ちよく歌うことができました。3年2組には、体育祭の

創作ダンスの時のように団結する力があります。今回の成果も、クラス全員の努力と団結する力があってこそです。私はこのクラスで最優秀賞をいただけたことがとても嬉しいです。最優秀賞クラス 若山 紗彩

- 成績
- 最優秀賞 3年2組
 - 優秀賞 3年1・3組
 - 最優秀伴奏者賞 笠松もえ
 - 最優秀指揮者賞 渡邊智允



白鷗大学足利中学校 入学試験のご案内

試験日	願書受付期間
第3回 一般入試 平成26年 1月25日(土)	1月20日(月)~1月22日(水)

☎ 0284-42-1131 HPアドレス <http://www.hakuoh-j.jp>

夏の思い出

7/30
〜
8/1

志賀高原林間学校

林間学校の各実行委員長に行事にかけた思いを語ってもらいました。

史上最高の キャンプファイヤー 実行委員長 豊田 汐理

実行委員長として臨んだ最後のキャンプファイヤー。昨年は先輩に任せきりだった仕事を自分でやるのはとても大変でした。みんなの意思をまとめたり、内容を考えたり。でもそれと同時に今までで一番楽しくて、中身の濃いキャンプファイヤーになりました。終わって後にはいろいろな人から「すっごく楽しかったよ!」と言ってもらった時は、実行委員長としてこんなにやりがいがあるんだ、と思うことができました。最後に実行委員

会のみんな、頼りない実行委員長だったと思いきや、ついてきてくれてありがとう。オタ芸は少し恥ずかしかったかもしれないけれど評判は上々でした(笑)。最高に盛り上げてくれたこと、本当に感謝しています。

未知との遭遇in 志賀高原 実行委員長 岡本 憲暁

僕はウォークラリーという行事に強く思い入れがある。今まで見たことがなかった自然の織りなす景色、高山植物、湿地帯に住む生き物など志賀高原だからこそ出会えるものを教えてくれるからだ。当日、晴天に恵まれたおかげでヒカリゴケの不思議な緑の輝きをはっきり目にしたり、空気が澄



みきって地形の妙による山びこが何度も聞こえる場所があり、みんながあまりの素晴らしさに驚嘆していたのが忘れられない。行程中、子熊が目撃されるといふ事態で変更を余儀なくされたが、その一方で僕は新たな野生の生命を育む自然の中を歩いているのだと実感した。想定外な出来事もあったが、一学期中から

猛獣だ! 鬼だ! 室内レクだ! 実行委員長 市川 星弥

委員が総力を挙げて企画、準備に取り組んだおかげで無事に、そして普段できない体験をして終えられたことに周囲にとっても感謝しつつ、ほっとしている。

人の前に立って話したり指示をしたりするのは自分に向いていないのかな、と思う人程、実行委員長を一度経験してみたいと思います。僕は室内レク実行委員に二年連続して参加しました。それは去年の先輩への憧れや単純に楽しかったからです。元々、人前で話すのが苦手だった僕は舞台で堂々とレクリエーションの説明をする先輩方がとてもすごいと思っていました。その時からもう実行委員長をしよう、心の中で決めていたのだと思います。しかし、やってみると時間や生徒の移動など様々な点で苦労しました。

本番はこれ以上ない盛り上がりを見せ、実行委員と生徒達が一体となったレクでした。大きな背中を見せて後輩達に来年室内レク実行委員になってもらいたいと思っ、一生懸命委員長としての役目を果たしました。盛り上げてくれた生徒のみなさんに感謝しています。

委員が総力を挙げて企画、準備に取り組んだおかげで無事に、そして普段できない体験をして終えられたことに周囲にとっても感謝しつつ、ほっとしている。

夜のフラワーパークに きらめく☆ 〜イルミネーション作品〜

10月27日にあしかがフラワーパークでイルミネーションの点灯式が行われました。今回、私たち3年生は、卒業制作として、このイルミネーションに参加することになりました。約1か月間かけて、その準備にあたりました。自分たちのオリジナルのイルミネーションを作成することは、思ったより難しく、大変な作業でした。まず、LEDの着色は1つ1つが細かく、数も多いので、みんなの協力が必要でした。そして、電球の配列は、色や光のバランスを考えながら行ったため、思ったより時間がかかりました。10月の中旬頃からは、放課後も利用して制作に当たりました。そうして完成した私たちの4作品はどれも自分たちらしい、個性的な作品となりました。

当日の点灯式では学校を代表して長浜希実さんが点灯のボタンを押すことになり、来場しているお客さんみんなでカウントダウンとなりました。「3, 2, 1, 0」の声とともにすべてのイルミネーションがライトアップ



され、目的が広がりました。幻想的な世界がそこに動きました。4作品もきれいに輝いていて、ほっとしました。それらの作品をご覧になっていたお客さん何人かに私たちの作品の感想を伺ってみました。「中学生らしい、元気なデザインが良い」「色合いがとてもきれい」など、たくさんのお褒めの言葉をいただきました。私たちみんなで、一生懸命作ったイルミネーションはお客さんの評判も良く、とても誇りに思いました。

新聞委員 小林 優花

「はだしのゲン」が昨年十一月より松江市の市立中学校の図書館で閲覧制限をかけられてしまったという記事を目にした。描写が過激だという意見や、あるいはない蛮行だという意見があったかららしい。教育委員会は「作品は価値が高いから撤去はしないが、子どもたちが自由に見られないように配慮する」と言ったそうだが、はたしてそれは

「臭いものにはふたをす」と一時しのぎに面倒なことを知られないようにすることを。記事を読んで、僕の脳裏によぎった言葉だ。毎年八月の初旬は、原爆の日や終戦の日があるため、戦争とは何かを考えるきっかけとなっている。先日「はだしのゲン」が昨年十一月より松江市の市立中学校の図書館で閲覧制限をかけられてしまったという記事を目にした。描写が過激だという意見や、あるいはない蛮行だという意見があったかららしい。教育委員会は「作品は価値が高いから撤去はしないが、子どもたちが自由に見られないように配慮する」と言ったそうだが、はたしてそれは

「はだしのゲン」という作品を見えなくしてしまうことが残酷さから子どもを守るということなのだろうか。臭いものにはふたをしたままではいけない。僕は、事実は事実としてありのままを伝えるべきだと思う。そして、それらをどのように捉えるか、作品の「見方」を教えるべきではないかと思つた。

最高の思い出in America 〜足利市訪米団参加記〜

渡邊 智允

僕は訪米団として過ごした十日間のアメリカでの生活で、多くの貴重な体験をし、多くの人に出逢いました。

迎えたホームステイ初日。思いもよらない出来事が待っていました。本来ならばホストブラザーのシーンが所属するチームの野球の試合を観戦するはずでした。しかし、どういうわけか、「観戦」ではなく「試合に出場」することになったのです。それも高校生の。僕は時

差ボケで今にも閉じそうに重たい瞼を必死に開き、鈍った身体を最大限動かして出場しました。初めは内野に芝が張られていたアメリカの独特なグラウンドに戸惑いましたが、なんと三安打の活躍で得点に結びつけることができました。どの打席も、観客の方々が「下しく!」と応援してくれました。さらに、一イニングでしたが投手としてマウンドに立ちました。野球の本場であるアメリカで思わぬデビューを果たすことができました。試合を通じてアメリカの空気に少し溶け込むことができたように感じました。

三日間の学校通学では、アメリカの高校生のライフスタイルにとっても驚きました。まず多くの高校生が自動車で通学することです。僕はシーンの自動車でいっしょに通学しました。朝、通学の自動車で渋滞が起こることもありました。そして授業です。授業はとても自由な雰囲気です。日本の授業風景とは全く違ったものでした。



前列左から二人目が渡邊君

『はだしのゲン』が伝えたいもの

加持 翔哉

「臭いものにはふたをす」と一時しのぎに面倒なことを知られないようにすることを。記事を読んで、僕の脳裏によぎった言葉だ。毎年八月の初旬は、原爆の日や終戦の日があるため、戦争とは何かを考えるきっかけとなっている。先日「はだしのゲン」が昨年十一月より松江市の市立中学校の図書館で閲覧制限をかけられてしまったという記事を目にした。描写が過激だという意見や、あるいはない蛮行だという意見があったかららしい。教育委員会は「作品は価値が高いから撤去はしないが、子どもたちが自由に見られないように配慮する」と言ったそうだが、はたしてそれは

正しい判断なのだろうか。作者は、「戦争と原爆を食い止めるために戦争の悲惨さを伝えたい」「実際はもっと残酷だ」と言っている。また、作者の妻は、「戦争や原爆の悲惨さや痛みを分かっている」と嘆いている。確かに作品を見ると、人間が火にあぶられる溶けていくさまや、残酷な殺し方が描かれている。しかしそれは、戦争を実際に経験した作者だからこそその表現であり、二度とやっではないいけないものだということの叫びの表現なのではないかと思う。戦争は世界中にたくさんのお人を苦しめた。戦争を経験した多くの人が、「一番怖いのは戦

争が風化してしまうことだ」と言っている。事実をそのまま伝えなければ何の意味もなくなってしまうのではないか。戦後七十年近く平和に過ごしてきた僕らには、想像すらできないことなのだから。この記事からは、大人たちが「教えて育てる」ということから逃げていくように思えた。大人が戦争を風化させていけないだろうか。(中略)

「はだしのゲン」という作品を見えなくしてしまうことが残酷さから子どもを守るということなのだろうか。臭いものにはふたをしたままではいけない。僕は、事実は事実としてありのままを伝えるべきだと思う。そして、それらをどのように捉えるか、作品の「見方」を教えるべきではないかと思つた。